
世にも奇妙な或華さん

冬雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世にも奇妙な或華さん

【Nコード】

N2490B

【作者名】

冬雪

【あらすじ】

主人公——高校一年生になったばかりの、座右の銘は『平和が一番』（こうさかだいち）な神斜大地は、ふとした気まぐれから、一人の少女と出会う。それは偶然か、あるいは必然か。ここに——迷走する少年と、黙祷する少女の、奇妙にして痛快な日々が始まった——

第一話：運命の日

葉芽吹くのどかな春の日。

窮屈な受験戦争の日々から解放され、晴れて高校一年生になった

俺——神斜大地こうさか だいちは、教室の隅の席から穏やかな窓の外を眺めていた。

「……ふあああ」

この千城ヶ崎高等学校に来て、はや一ヶ月が過ぎた。

特に目立った長所のない俺は、普通に友達を何人か作り、勉強もそこそこに、これといった問題も起こさずにそれなりにやってこれている。

何事もないのはいいことだ。中には、眩暈めまいがするような驚天動地の出来事を心から望んでいる無責任な友人もいるが、アレは単にバカなだけなので気にしない。なんだかんだ言っても平和が一番に決まってる。

きーんこーんかーんこーん。

これと言って特別な出来事もなく、放課後になった。

この学校は部活動に力を入れているらしく、生徒たちが授業を受ける教室が含まれた普通教室棟と向かい合う形で、部活棟なるものが存在するのだが、これが前者より大きいのだからなんとも違和感がある。しかも噂では地下まであるとか。

「……部活かあ」

前述したように、普通人代表的な俺は得意なスポーツなんて持ち合わせちゃいないし、第一疲れるのは嫌いなので運動部は真っ向からパスである。そんなわけで入るとすれば文化部なんだが、配られた部活一覧表に目を通してピンとくるものがなかったので未だに帰宅部なのだ。

「別に帰宅部でもいいんだけど……」

しかし、折角の高校生活を勉強だけで過ごすのも味気ないと言えば味気ない。俺も一応高校生男子の端くれなわけで、素敵な出会いが欲しくないかと聞かれれば、……そりゃあ、欲しいさ、うん。

「……ちよつと、のぞいて見るか」

その、見るだけならタダだし。

そう考えて、俺はやや年季の入った蔵おごそかな建物へ足を踏み入れた。

——ああ。思えばこのちよつとした気まぐれが、つつましくも平穏な日々が悲劇……いや悪夢へと急転直下する第一歩だったのだ。できることなら、いくら犠牲を払ってでも時間の針を戻したい、と最初の内は心から願っていた。もちろんそんなことは不可能で、自分の携帯の時刻表示を一時戻してみても、なんの意味もなさないことは充分承知してるが、そう願わずにはいられなかった。

それ程までに——彼女との出会いは、衝撃的だった。

部活棟の中は、基本的に普通教室棟と同じ構造になっている。ただ、1Aとか1Bとか書かれている表札が、文芸部とか将棋部とかに変わっていた。

「へえ……思ったより」

そう。想像していたよりも、かなり部活の種類が豊富なのだ。しかも、どの部室にも人のいる気配がする。上の方から響いてくるトランペットやホルンの音は、吹奏楽部のものだろう。……ただ、演奏の合間合間に聞こえてくる、ウオオオン、という獣の遠吠えじみた怒声が混じるのが凄く気になる。

それから、一通り部活棟を周って見たものの、やはりこれと言ってピンとくるものは見つからなかった。まあ、元々そこまで積極的じゃなかったし、別にいいか。そもそも、自分のやりたいことがわかっていない俺が、部活に入るなんていうのもおこがましかったのかも知れない。

「…帰る、か」

もう日も暮れたし、さすがに疲れた。

と。一階に降りたところで、さらに下へと続く階段を発見した。

「あれ…地下なんてあったんだ、ここ」

普通教室棟にはそんなものなかったから、気づかなかった。倉庫でもあるのだろうか。

「……………」

……なんだか、無性に気になる。家の物置から宝物の地図めいた物を発見した時のような、不思議な高揚感。

そう思った時、既に俺の足は持ち主の意思とは関係なく階段を降り始めていた。

地下は、構造上は地上とほとんど変わらなかった。だが、日の光が差し込まないというだけでこれだけ違うのか、と感心してしまうくらい不気味極まりない。どこからか吹いてくる風は妙に生暖かくて気持ち悪い。明かりは、等間隔に設置されたむき出しの頼りない豆電球だけ。

だが、様変わりしたのは外気や雰囲気だけではなかった。

「何々……儉約部、測量部、それに……墮落部？」

……コメントのしようがない部活が、さも当然のように整然と並んでいる。こんな怪しげな部活、配布された部活紹介のプリントには載っていなかったはずだ。いや、載ってたら載ってたで問題あるような気もするが。

「さて……どうしたもんか……？」

地下こつちの方が色々な意味で興味をそえられる人もいるだろう。が、俺はあくまで平和主義者なんで、数秒考えてから、さっさと立ち去ろう、と決断した。なんていうか、一度入ってしまったら帰れなくなりそうな予感がする。

そんな訳で一秒でも早く脱出しようと、くるりと踵を返し、

コツ、コツ、コツ、コツ。

階段から、重々しい足音が一つ響いてきた。この地下に部室を構える酔狂な部活の一員さんなんだろうか。だとするといろいろと面倒だ。頭はそう理解しているのに――その足音だけに、全ての意識を集中している自分がいた。

果たして、降りてきたのは真っ黒な服に身を包んだ一人の男子。体格からして恐らく上級生だろう。できれば俺のことなんて無視して歩き去って欲しかったんだが、

「――ふむ」

黒服の男子は、そ知らぬ顔を装う俺の前でピタリと停止した。薄暗いので判然としないが、どうやら睨まれているらしい。中途半端な明かりのせいで、男子の彫りの深い顔の明と暗とがハッキリと区切られ、端的に言ってしまうえば非常にコワイ。

「……な、なんすか？」

一応敬語めいたものを使っておく。男子は答えず、代わりに何か深いところを覗く^{のぞ}ような鋭利な視線で俺を上から下までじつくりと凝視した後、

「立ち話も無粋だからな。入るがいい」

有無を言わせぬ威圧感のある太い声で、唐突にそう告げた。

「――はい？」

男子は、俺の疑問符をあっさり無視して横を通り抜け、俺の背にあった木製のドアを当然のように開いた。

……不安が的中してしまった。このまま言われるがままに従っていてはなし崩し的に入部させられてしまうようなやな予感がする。現に、危険度を示す本能シグナルは最大音量でウーウー^{うな}唸っているが、

「どうした？」

「あ……いえ」

まさに俺が逃げようとする絶妙なタイミングで呼び掛けられ、思

わず返事をしてしまった。……まあ、少し話を聞くくらいなら大丈夫だろう。ヤバそうになったら用事があるとか適当に言い含めて退散すればいいし。

——と、そういえばここは一体何部なんだろうか。顔を上げ、表札を確認する。

「……………へ？」

書かれていたのは、『黙禱部』という無骨な三文字。とてもじゃないが俺なんかの発想力じゃ活動内容が想像できない謎めいたネーミングである。

中からは鼻歌らしきものが聞こえる。でたらめのように、何かしらの統一性を思わせる不思議な旋律。

「……………お、おじゃましまーす」

……………それらの謎要素に、不覚にも少しだけ興味を惹かれてしまった。

具体的な理由なんて説明できない。ただ——そう、ただ、こんなネガティブそうな部活の名付け親を見なくなった。それだけだ。俺の思い出したくない過去その他諸々とは一切関係ない。

と、男子は一度くると振り返って、

「ああ。自己紹介が遅れたな。俺は玲人。朽木玲人^{くちき れいじ}だ。よろしくな」
芝居がかった口調で勝手に名乗って、うやうやしく一礼してから俺を部室に招き入れた。

——コレは、人間じゃない。

初めに浮かんだ感想は、そんな正解だった。

「待たせたな、還界。そちらの首尾はどうだ？」

「全然ダメ。どれもこれもミミズから生まれたみたいな貧弱野郎ばっかりだわ」

部屋の中には、長方形のテーブルが一つ。長い方の辺には、三人

くらいが並べそうな大きさだ。

そして、彼女は、短い方の辺に——つまり机に直接腰掛け、こちらに背を向けたまま答えた。

当然、顔が見えない。だが、前を向いていた所で顔なんて目に入らなかっただろう。

彼女のややウェーブのかかった肩を少し過ぎるぐらいの長さの繊細な長髪。部屋のある蛍光灯の光を幻想的に反射しながら、彼女が首を動かす度に、意思を持っているように踊っている。粉々に砕いたガラスを散りばめているような錯覚を抱かせる彼女の髪は——限りなく銀色に近い、白髪だった。

それに、言葉を失った。

浮かんだ感情は、驚愕でも呆然でもなく、——純粹な、感動。思わず、そのまま

「——おっと」

……少し、危ない所だった。よし、まずは落ち着こう、俺。来客を無視して話を続ける、彼女の話に耳を傾ける。

「そっちはどうなの？ 口達者な貴方の事だから、五人や十人は軽く捕まえてこれたんでしょね？」

あからさまに人を上から見下ろしている口調。しかし、朽木は別に気分を害した様子もなく、

「無論だ。だが一度に大勢で詰め掛けるにはここは少々手狭なのでな。一番見込みがありそうな男を連れてきた」

自信たっぷりな淡々と告げた。

ふーん、でも朽木以外に俺は人影を見なかったんだが。見込みがありそうな男とは、一体誰のことなんだろうか？

「……へえ。貴方がそこまで言うなら本物なんでしょうね。ちよつと興味あるわ」

ふわり。白髪の子が、髪をなびかせながら振り向いた。俺と向き合う。長髪とは対照的に、いや髪の黒さを全て吸い込んだような

深い闇色の両眼が、真っ直ぐに俺の瞳を射抜く。

「あ、えっと……ども」

きゅっと引き締まった小さな唇、攻撃的な印象を与えるやや尖った瞳、凜とした眉。端整な顔立ちは、西洋人形を思わせた。……要するに、めっさカワイイ。いや、これは綺麗の領域か。

「…ふうん。肝は座ってるみたいね。だけど、緩み切った顔が減点対象ね」

どうやら、俺は試されていたらしい。女子の睨みから目を逸らさなかった（実際には見とれていたただけなんだが）のはよかったが、鼻の下を伸ばしていたのはダメだった、ってことか。……いや、不意打ちだったしなあ。

「まあそう言うな。なんにせよ、部員が増える分には損はあるまい？」

得意満面に朽木がなだめる。……や、ちょっとタンマ。誰が入るんだ？ と念のため聞いておきたい。

「あのー……それって、もしかして俺のコト？」

恐る恐る聞くと、朽木は一瞬表情を変えずに硬直して、

「——無論だ。第一、この部室に足を踏み入れた時点でお前は既に立派に黙祷部の一員だ」

確定事項のように答えた。んなアホな。

「それじゃ、まずは採寸からかしら？」

俺を無視して、話は勝手に進んで行く。

「なあ、いやだから俺まだ入ると決めた訳じゃ」

「うむ。——原則として、黙祷部として行動している間は規定の服を着る決まりだ」

聞いてもないのに説明してくれる親切な朽木。お前、ちょっと後で体育館裏来いやコラ。

「小さいことでガタガタ騒ぐんじゃありません。それでも『棒付き』なの？」

「はあ？ ……って、おい！」

サラッと臆面もなく下ネタに走りやがったぞ、こいつ。

「……仕方ないわね。ほら、これ貸してあげるから納得しなさい」
殺気立つ俺に哀れみのため息を投げかけた白髪の女子は、読んでいた分厚い本を手渡してきた。表紙からすると、これは……聖書のようだ――

“「あ、姉貴……？」

気丈を装ったシオリの声は、しかし僅かに震えている。

「ふふふ、シオリったらそんなに怯えちゃって。かわいいなあ」

カナは後ろからおぶさるような形でシオリを抱き締め、首筋にふうつ、と息を吹きかける。

「ふわぁ……？」

途端、酔ったようにシオリの目の焦点がぼやけ、体の力が抜ける。

「シオリ……私が、優しくしてあげるね？」

カナはふわりと微笑むと、そのまま妹であるシオリのパジャマを――

“

――見なかった、ことにしよう。

無言で聖書だと思っていた禁断の本を返した。

「あら、お気に召さなかった？　なら、こっちの更にハードな海外モノを――」

「いや、謹んで遠慮します」

というか、初対面の人間にこんなのを薦めるあなたは一体何者ですか？

「そう。面白いのに」

……それから十分ほど、クーラーの室外機の音のように平坦な口調の朽木先輩の説明を聞いたところによると、どうやらこの部活の

主目的は、部活間で生じるトラブルの仲裁を図ることにあるらしい。……それはいいんだが、彼の解説の中に黙祷のものの字も出てこなかったのは何故だろうか。

「じゃあ、ボランティアみたいなモンですか」

なるほど、だから修道服モドキを着ているのか。うん、そうに違いない。そこ、ムリヤリ納得しようと試みてるだけだから突っ込まないよーに。なにせ、ここには意味のわからないものが多すぎるから、少しでも理解したフリをしておかないと現実感を喪失しかねない気がするのだ。

「違うわ」

と、朽木先輩が語っている間、終始淡々と鼻歌を歌いながら偽聖書を読み耽^{ふけ}っていたカエラさんがやけに強く否定した。俺が聞き返すと、

「生徒会及び校長に部活としての存在を承認された部活動には、例外なく『序列』が設定される。『序列』とは即ち各部活動が形骸化するのを阻止する為の制度であり、『序列』が高ければ高いほど優遇される傾向にある。『序列』の高さは活動の頻度・成績によって定められる」

再び朽木先輩のわざとやってるとしか思えない分かり難い解説が答えてくれた。ふむふむ、サッパリわからん。そもそも序列とやらが具体的になんのかを最初に言うべきじゃないのか？ もっと聞き手の都合も考えてほしい。

「……要するに、活動すればする程『序列』——つまりランキングが上がって、予算や部室や備品のグレードも上がる、ってこと。わかった？」

「ええ、まあ」

この女子、意外と説明が上手かった。というか、最初からそう言うてくれると助かるんだが。

「それじゃあ、あの、えーっと…」

む。そういえば、まだ名前聞いてなかったな。

「還界或華」

「は？」

えっと、文脈からすると、名乗られたんだよね？

「……か・え・ら・あ・る・かよ。還界或華^{かえらあるか}。一年C組よ」

「カエラアルカ……ねえ」

というか、同級生だったのか。落ち着いた雰囲気からして、絶対先輩だと思っていた。

「ちなみに玲人は三年……G組だったかしら？」

「うむ」

小さく首肯する朽木先輩。まあ、この人はむしろ教師と名乗られても疑わなくらいの威風堂々とした顔だから驚かない。むしろカエラさんが彼を名前で呼んでいることの方がインパクトある。……えーっと、なんの話してたんだったけ。

「それでカエラ……だったけ？ 聞いた感じじゃ黙祷部はボランティアっぽいけど、そうじゃないのか？」

「勿論よ」

いや、何か誇らしげなのが気になるんだが。そこは威張るとこじゃないだろ。

「私の目的は『序列』の頂点。そこに辿り着いた部活の部長は、生徒会長とほぼ同等、あるいはそれ以上の権限を与えられるのよ。だから、表面上見栄えのいい慈善事業なんて偽善をやってるのよ」

「……」

身もフタもない台詞に、目を逸らす朽木先輩、絶句する俺。……

なんとまあ、自分を偽らないヤツだな、コイツ。

「それと、貴方」

「ん？」

「カエラ、ではなく還界『さん』、と呼びなさい。格上の人間を敬うのは人としての礼儀でしょう？」

は？ いや、俺とお前同級生だし。そもそも、偽聖書に目を落としたままこっちを見もしないで話すお前の方がよっぽど礼儀知らず

だろ。人の目を見て話せ。

「年上ではありません。格が上だ、と言ってるのよ」

「……なあ、殴っていいか？」

いくら温和な俺でも、ここまで露骨にケンカ売られちゃあさすがに腹が立つってもんだ。が、

「やってみれば？ 出来るならね」

さらりと受け流される。……こいつ、女だから殴られないだろう、って腹括ってる訳じゃない。実際に戦って俺に勝つ自信が本当にあるようだ。

「どうしたの？ 口だけ？」

背中から満ち溢れる自信と威圧感。俺だって、伊達に十六年間男をやってたわけじゃないから、少しはわかる。確かにこいつは強い。

——が、その方が壊しがいがあるってもんだ。

「——いや、やめとく。悪かったな、還界さん」

……深呼吸を一つ。それだけで、なんとか動悸は治まってくれた。

——全く。俺は、何度同じ過ちを繰り返しそうとしてるんだ。

「……そう。まあいいわ」

どこか残念そうに呟いた還界さんは、ぱたん、と本を閉じた。

「それじゃ、貴方の最初の仕事よ。来客の対応をなさい」

「はい？」

還界さんの不可解な台詞と同時に、

「あのー……どなたかいらっしゃいませんかー？」

こんこん、と控えめなノックと、いかにも申し訳なさそうな間延びした声が聞こえてきた。

「……えーっと」

つまり、俺が出ろってことか？　　というか還界さんはノック音をする前に来客に気づいていたらしい。……単純に耳がいいから、つて訳でもなさそうだ。

「……」

とはいえ、俺はまだ正式な部員じゃない。どうしたもんか、と朽木先輩に視線を送ると、満足げに頷かれた。……まあ、いいか。

「うーい」

ドアを開けると、その向こうの人影がビクツと揺れた。

「あ、あの……も、黙祷部の方ですよね？」

扉の向こうにいたのは、体操着姿の女子だった。ショートカットの下にある、くりくりとした大きな瞳が不安の色に濡れている。肩は小刻みに震えていて、恐縮しているのがこっちが心配してあげたくなるくらいよくわかる。そりゃそうだろう。誰だってこんな地下にある怪しげな部活を訪ねるとなれば用心する。

「違います」

だが、残念ながら俺は正式にはまだ部員じゃないので、正直に答えておく。

「えっ、ええっ!？」

予想外の回答に驚く女子。……あわてふためく仕草が、小動物みたいでちょっと面白い。

「あ、あの、じゃ……も、黙祷部の方、いらっしゃいますか？」

「いますけど……」

振り返るが、二人とも無反応。

「……引きこもってます」

「え？」

「……んじゃ、そゆことで」

場の流れに沿って、ゆっくりと扉を閉めていく。果たして、

「あ……ちょ、ちょっと待って下さいっ!!」

ずがだんっ!　ドアの隙間に足が挟まれ、同時に俺の脳天に強烈な空手チョップが放たれた。……なんで?

「……成る程。つまり、校庭にバトミントン部が練習の出来るスペースが欲しい、と」

「そ、そうなんです……」

やや熱を持った額を押さえながら、約五分ほど謝りに謝ってくれた女子生徒（意外にも二年生らしい）の話を総合するところなる。彼女が話している間中、朽木先輩は興味深い観察対象を見るような目つきで来客を凝視し、還界さんに至っては一度も偽聖書から目を離すことがなかった。

「今の校庭は、サッカー部と野球部に占領されちゃって……私たちみたいな少数人数の部活が活動できる場所がないんです……」

なんでも、体育館の方は『序列』ランキング上位（つまり成績がいいってことだろう）の部活で占められていてどうしようもないとか。朽木先輩曰く、

「サッカー部はともかく、野球部は三年前に新設された部活だからな。将来有望ではあるが、まだ具体的な結果は一つしか残していない」

具体的な結果？ 地方大会に優勝して県大会ベスト16とかか？

「県大会準優勝だ」

「え」

それは……かなり凄いいんじゃないか？

だが、還界さんはおもむろに本を閉じると、

「その程度なら問題ないわ。早速『対部戦』と行きましょう」

朝飯前よ、と言わんばかりに不敵に笑うと、バトミントン部の女子と目を合わせることなく部室を出てしまった。

「ここは俺が引き受けた。早々に還界を追え」

「はあ……」

とりあえず、何かとんでもないことが起きるような気がするので、俺がストッパーとしてついてやることにしよう。……俺なんかじゃ、津波に砂の城壁で対抗するぐらいの抵抗しかできないだろうけど。

第一話：運命の日（後書き）

初めての投稿で、心臓バクバクです。（笑）
えーっと、とりあえず……よろしくお願いします、まる。

第二話：銀色が征（ゆ）く

……これはどこの異次元か。

「^で出撃ます」

黒いヘルメットを被り、颯爽^{さっそう}とバッターボックスへ向かう還界さん。鼻歌がロッキーのテーマに変わっている。

「……っ」

そのあまりにも堂の入った仕草に手強さを感じ取ったのか、山田^{キャッチ}君は息をのんだ。

「——それじゃ、審判部の名の元に、ここに野球部対黙禱部の『対部戦』の開戦を宣言するわ。勝負は一打席、ヒットを打てば黙禱部の勝ち。アウトにすれば野球部の勝ち。どっちが勝ってもいいけど、愉しませて頂戴ね？」

どこか妖美な長身の女子生徒の開始^{プレイボール}宣言によって、その試合は始まった。

……話の展開の早さについていけない。

ずかずかと練習中の野球部に乗り込んでいった還界さんは、「争いましょう。こっちは全ポイント賭け、そちらは校庭という場所だけ。勝負方法もそちらが望むものでいいわ。文句ないでしょう？」

と言い放ち、十分後にはこんな場が設けられていた。

「あ、あの……ホントに大丈夫なんでしょうか……？」

「さあ……どうなんでしょう」

俺は、バックネット裏から件^{くだん}のバトミントン部の女子と試合を眺めている。

彼女が心配するのも無理もない。なんだかよくわからないが、とにかく勝負は始まってしまった。しかも野球の一打席対決という相

手のテリトリーの中で。ちなみに、朽木先輩は審判部（こういう試合の審判をする部活だとか。そんなのまであるのか）の生徒が来るなり、急用が出来たとかで逃げるように去って行ってしまった。知り合いだったんだろうか。

尤も、俺はこの試合どっちが勝とうが負けようが正直俺に実害はないので、野次馬気分で観戦させてもらっている。
ってな訳で、以下、実況生中継でお送りします。

（……コイツ、思ったよりデキそうだな）

（そうかぁ？ 『銀色の悪魔』だかなんだか知らねえけど、所詮オシナだろ）

（……まあ、な。でも、とりあえず一球様子を見させてくれ）

（へいへーいっと）

バッテリー間のアイコンタクトが済んだようだ。大輔君は、ピッチャー大きな息を吐いてから、振りかぶって第一球——！

ズバー——ン！

「ボール」

一瞬の間の後、如月（審判部の人）主審は冷静に判定を下した。還界さんは微動だにしない。……というか、俺には全く球の軌道が見えなかった。さすがは県大会準優勝のピッチャーである。ホントに打てるのか、こんなの？

（……警戒しすぎか？）

ピッチャーにボールを戻しつつ、還界さんを観察するキャッチャーは、

「……………」

ジロリ、と無言で威圧するように睨み返されて、慌てて目を逸らした。

（よ、よし……外角低めいっぱいだ）

（つたく、ヤマちゃんも心配性なこって）

全く同じフォームから第二球。

「……ハアッ！！」

ガギーーンン！ ボールは鈍い音と共に弾き返された。

「「うそっ！？」「」」

バッテリーと俺は同時に驚きの声をあげ、ボールの行方を追う。

白球は高く舞い上がり、そのままレフト側のポールの……左側に切れた。

「ファール。惜っしい♪」

これでカウントはワンストライクワンボール。還界さんとしては、相手が侮っていたここで決めておきたかったろう。

（——見たか？ 今の振り）

（……ああ。こりゃ、オンナだと思って甘く見てると痛い目見るわな）

バッテリーがお互いに警戒を促し合う。と、

「……あのエース、意外と制球力が無いのね。あなたが本来要求したコースに対して外にボール半個分もズレるなんて。ま、そのお陰で命拾いしたわけだけど」

還界さんは、独り言のように何かを呟いた。

「——っ！！？」

ここからは聞き取れなかったが、的を射た発言だったらしい。キヤッチャーの動揺はマスク越しでも見てとれた。……これは、いよいよ彼女の勝利が見えてきた、かもしれない。

（……ダイ、念のためアレでいこう）

（……りょーかい。しかし、まさか大会用の秘密兵器、こんなトコで使うハメになるとはなあ！）

ピッチャー、一際大きく振りかぶって第三球——

——は、速い！ 今までの驕りおごを捨てたこの球はまさに渾身、全

身全霊の一球入魂!!

(最高のスピードとコースだ! これなら!)

還界さんのバットが動く。コースは外角低め、二球目と寸分違わず同じ、ように見える。だが、還界さんは『その先』まで看破した。「――ストレートと同じ球威・球速で打者の手元で落ちるフオーク。試合で投げるなら、球離れが早くなる問題を解決する必要があるわね」

「なっ――」

カッキ――ン!!

これ以上ないってくらいの快音。ああ、白球は完璧な放物線を描き、遥か高く遠い空に吸い込まれて消えていきましたとさ、まる。

「くそおっ……ヤマちゃん、オレは、オレは……っ!」

「気を落とすな、ダイ。……相手が悪かった」

マウンドでむせび泣く大輔君を無視して、悠々とウィニングランする還界さん。今更だけど、このヒトはどれだけ超人なんだろうか? いやホント。

やがて、俺含め観衆が呆然とする中、還界さんはやけに力を込めてがすっ、とホームを踏み付けると、

「――それじゃ、十分以内にとっとと撤収なさい?」

一点のケチもつけようのない極上あくまの笑みで、高らかに勝利宣言した。

「あ……ありがとうございましたっ!」

「別にいいわ。丁度いいストレス発散になったしね」

ぺこぺこことかいがいしく頭を下げるバトミントン部員の皆さんに目を向けず、鼻歌を口ずさみながら聖書（エロ本）を読みふける還界さん。

「何、ギブアンドテイクというものだ。感謝するなら、我らが部活に依頼するという英断を下した自身に述べるべきだな」

いつの間にか戻ってきた朽木先輩は、やけに偉そうにご高説たまわった。アンタ何もしてないでしょ。

騒がしい足音が去って、部室が妙に寂しくなる。

「……行っちゃいましたね」

「ああ」

……しかし、改めて考えてみると俺はかなり歴史的な瞬間——いや言い過ぎか、それなりに凄いものを見せてもらったんじゃないかなるか。

県大会で活躍する程の実力があるピッチャーを、僅か一打席でホームランという完璧な形で打ち破った還界さん。彼女は『ストレス発散』ぐらいの出来事としか捉えてないのだから驚きものである。

もしかして彼女は、他にもこんな偉業を平然と達成したことがあるんだらうか。だとしたら少しは尊敬してやってもいいかも知れない。それにしても、還界さんがやっていることは、彼女の思惑はどうあれ、立場の弱い誰かを救っていることに他ならない。これじゃまるで——正義の味方みたいだ。……そこに、感心するのではなく、違和感を覚えた。失礼かも知れないが（多分、直接言っても気にしないだらうとは思うが）、彼女が慈善事業こんなコトを進んでやるとは思えないから。

「……いや、凄かった」

そんな疑問を抱いていたからだろうか。思わず、ポツリと本音が漏れた。すると、還界さんは少し目をぱちくりさせた後、すぐに元の表情に戻って、

「当然よ。あんな性別で相手の本質を見極め損ねるようなダメ男に負ける私じゃないわ」

うわあ、言いたい放題。

やっぱり、還界さんは還界さんだった。

と、

きーんこーんかーんこーん。

部活終了を告げるチャイムが鳴った。

「……それじゃ、帰りましょうか」

還界さんは、手早く帰り支度を済ませると部室から出た。ところでアンタ、その格好のまま帰るんすか？

俺の正気を疑うような視線をどう取ったのか、

「ああ、明日は貴方にも労働してもらうから、そのつもりでね。集合時間は私よりも早く、遅刻は厳禁です。わかりましたね？」

ニコリ、とちつとも周りを和ませない笑顔を作って、わざわざ釘を刺してくれた。

次の日。誰が早送りのボタンを押したのか、学校はいつの間にか放課後になっていた。

「さて……どうしたもんか」

あの地下部室いじげんくうかんに行けば、還界さんが待っている。だが、行きたいか行きたくないかと聞かれれば答えは……正直言って、後者である。前回は話の流れに吞まれてしまった感があるものの、今回はこうしてゆっくりと考える時間が与えられている。つまり、前回以上に自分の行動に自分で責任を持つ必要があるのだ。

「……いや、やっぱり、なあ」

確かに、あの一打席勝負は見事だった。感動した。しかし俺自身にまで被害が及ぶとなれば話は別である。

鼻歌混じりでエロ本を熟読する、修道服に墨をぶちまけたような

珍妙な服を着こなす白髪の女子、還界さん。

神のお告げを伝える神父のような口調で全てを語る、夜を纏っているような黒服を好んで着ている男子、朽木先輩。

……しかし、改めて考えてみるとどうあがいても異常空間だな。

彼らは、下手に介入してしまえば、俺のこれまでの世界観を丸ごとひっくり返してしまうようなダイナマイト並みの危険物に違いない。

「……ホント、帰りたいたいんだけどなあ」

しかし、ここで手を引くと後でどんな報復が待っているか知れたものじゃない。

——こんな変な部活になんか入りません。そう言うだけだ。

「うし……行くか」

不可思議な非日常との別れを告げに。俺の平穏を取り戻す為に。

……本当に、それだけの理由で？

「ういーっす」

いっそ開き直って堂々とドアを開けると、中には既に還界さんが待っていた。いつも通り偽聖書を読み、鼻歌を紡いでいる。

「遅かったわね、雑用A」

……なんか、いきなり雑用扱いされた。どうやら、俺が彼女より遅く来たことに怒っているらしい。仕方ないだろ、悩んでたんだから。

「ああ、それでそのことなんだが、還界さん」

さっさと切り出してさっさと帰ろう、と思ったのだが

「それよ、それ」

こちらも見ずにビシッ、と俺の鼻先に指を突き付けてきた還界さんは、

「は？」

「その呼び方をやめなさい。家畜に氣遣われる王様なんて、見ていて気持ち悪いでしょう？」

……さいですか、自称女王サマ。お言葉ですが、俺にそう呼ばせたのはあなただった気がするんですが？

「えーっと……それじゃ還界、」

「あなた何様？　せいぜい或華さん、が妥協点よ」

おーい、なんか言ってることがさつきと矛盾してるぞー。

「……あら、そういうえは貴方の名前、まだ聞いてなかったわね。教えなさい」

そういやそうだ。というか、もしかして今日バックレてれば逃げ切ることも出来たかも知れない。……まあ、下してしまった決断を悔やんでもしょうがないか。

俺が名前を告げると、或華さんはそう、と小さく応じた。それだけだった。興味ないんかい。なら聞くなや。

「それじゃ行くわよ」

「え、どこへ？」

「いいから来なさい」

がしっ、と首根っこ引っ掴まれ、問答無用でズルズルと強制連行される。……俺は一体何をやらされるんでしょうーか？　いや、そもそも今日俺はこの部活と離別するために来たっていうのに。

「……なんてこったい」

最早抵抗する気力も湧かず、俺は大きくため息をついた。

辿り着いたのは普通教室棟の一階、ゲタ箱地点。平和そうにおしやべりなんかしながら下校していく生徒達の視線が切実に痛い。だが、同情するなら助けをくれ。ぷりーずへるぷみー。

「それじゃ、屈みなさい」

「屈む？」

なんでだ。全くもって意味不明だが、一応従っておく。既に今の俺には拒否権どころか基本的人権が尊重されているかどうかさえ疑わしい。

と、よいしょ、と掛け声がして、ついで肩に重量を感じた。

「ほら、早く立ちなさい」

……え、アンタ正気ですか？

オレの両肩に乗っている重くも柔らかい感触は、どうやら或華さんの、あー……その、オシ、いやケツのようだ、うん。はははは。マジ理解不能。

何、このヒト一体何を、考えて、しかも両足で締め上げるようにオレの首を挟み込、っつか、い、痛、イタタタター！？

「或華さん、締まつ、首締まってるんですけどっ！？」

「トロいからよ、……ソーローのクセに」

いやいやいや、なに放送禁止用語（いや、カタカナだからギリギリか？）をサラッと口走っちゃってるんですかアンタ。第一見たことないだろ。……っていや、そういう問題じゃないが。どうやら、俺は混乱してるらしいな。人間、一番冷静だと思ってる時に限って客観的に見ると暴走している、って言うし。

……ここは落ち着け、落ち着くんのだ。こんな時こそ男はクールであらねばなんのだ。心頭滅却、心頭滅却……心を無に……。

……。

……。

……。

「……………あ……………」

——意識が薄れていく。あの、息が、できないんですケド。

「……あら、意外としぶといのね。泡でも吹いたら許してあげようと思ったのに」

ようやく或華あくまの両足に込められていた力が抜ける。

「ごはっ、はっ、ふう……はあ……こ、殺す気か、アンタ！？」

「失礼ね。そんなことしたら反応が楽しめなくなるじゃない。それに、」

ぐわしっ、と頭を鷲掴みにされた、と俺が理解するより早く、

「あ・る・か・さ・ま、でしょ？」

万力に、締め付けられているような錯覚。しかも何気に地位がラ

ンクダウンしている俺。――ああ母さん、先立つ息子の親不孝をどうかお許し下さい。

……それから弄ばれること十分強、ようやく満足してくれたのか、或華さんはどこか恍惚としたため息をハア、と一つ。サドめ。

「……余計に時間を浪費したわね。本筋に戻りましょう」

というか、本来の目的なんてあったのか。

「……それじゃ、とりあえず降りろよ」

その、俺だつて一応男のはしくれだし、或華さんだって仮にも女子なんだから。このまま肩車したままってのは、その、色々と困る。お互いの為にも。

が、

「何言ってるの？ ホラ、さっさと走りなさい、馬」

バシンバシン、と壊れた電化製品を直すオヤジと大差ない手加減のなさで、後頭部を叩かれた。心なしか或華さんの口調は弾んでいる。やっぱサドだ、この人。

「走るって、どこに？」

「勿論、校舎中を、よ。もしかしてあなた、まだ今日の目的を理解していないの？」

あなたの頭はウニでできてるのかしらね？ とのたまいやがる或華さん。振り落としてやろうか。

「……理解も何も、教えてもらってないんだから知るわけないじゃねえか」

自然、口調が乱暴になる。が、或華さんはさほど気にする様子もなく、

「それでいいわ。最初^{ハナ}っからあなたに頭脳労働なんて求めてないもの。ホラ、足は足らしく黙^{あた}って私の言うとおりに動きなさい」

ピキン。

その一言で、さすがに俺の寛大なガマンゲージも限界値を超えた。男を否定されるならまだしも（いや、全然許容範囲じゃないが）、まともな思考形態を持った一生命体としての価値まで剥奪されちゃ

あこつちも抵抗せざるを得ない。

「……りょーかい。んじゃ、……行くぜ！」

全身に迸る熱いパトスを燃焼、今一刻のみ鋼の如き体軀を得る。

「ちょ……そんなに速くしたらバランスがぶっ!？」

ごつん。普段歩いている分には絶対に気づかない、校舎と校舎の接合部による天井の高さのズレに或華さんは顔面から激突した。前方不注意、免許しんらいをもっていないのに無理に車ひとを乗りこなそうとした罰である。

「それじゃとりあえずこのペースで校舎三週ぐらいするんでヨロシク」

淡々と告げる。

「ま、待ちなさい! もっとスピードを抑えなさい!」

赤くなつた鼻を押さえる或華さん。珍しく狼狽してるみたいだが、こつちはまだまだ腹の虫が治まらない。

「了解! スピード1、5倍で突っ走ります!」

「この、だから、ペースを落とさせて言ってるでしよってキャツ!」

もう人目なんてどうでもよかった。或華さんの意外な一面を見れた嬉しさか、両足は羽のように軽やかだ。本気でジャンプすれば、空だって飛べそうなくらい。

本当に楽しかった。腹が痛くなる程笑うのは久しぶりだ。

この行動の意味なんて知らなくていい。俺はただ或華さんを困らせたい一心で、死力を振り絞って校内を爆走し、五分後に生徒指導の強面の教師に捕まってこっぴどくしかられた。その時の或華さんは終始、つまらなそうに視線を泳がせて説教を右から左に流していた。

……結局、そのまま流れ解散となつてしまった。俺は或華さんに別れを告げることも出来ず（というか或華さんが殺気丸出しのオーラで俺を拒絶していた）、とぼとぼと帰路につくことにした。

……こんなに疲れた放課後は初めてだ。

擦り切れた心と体を引きずって、校門に辿り着いた。ああ、この外に出れば平和な生活ルーチンの枠内に戻る。
が。

「ご苦労だったな、神斜」

どこからか湧いて出た朽木先輩が、俺の希望を見事に打ち砕いてくれた。

「……どうも」

この人、どうも話が分かりにくい上に長ったらしいので苦手だ。
出来るなら、単刀直入に結論から言って欲しい。

「しかし、お前には存外価値があったようだ。全く、これを僥倖と呼ぶのか」

朽木先輩はふ、と自嘲するように軽く笑った。ほら、早速意味不明発言。

俺が辟易してますよー、的な顔を向けていることに気づいた彼は、「ふむ、ところで学校外で宣伝をしても効果は薄い。そろそろ広告塔の任を降りてもいいのではないか？」

「はい？」

よくわからないことを言ってから、俺の背中に手を回した。

びりりっ。何か剥がされる音。こ、これは……。

——『部員大募集中！ 殺る気がある人歓迎します！！』
BY 黙
禱部』。……いやいや、殺してどーする。

「——じゃなくて！ なんでこんなのが俺の背中に——」

あ、そういえば或華さんに背中をバシバシ叩かれた記憶があるよーなないよーな。もしやあの時に？ とすると、俺はこんなアホくさい看板を背負^{しょ}って校内を駆けずり回されてた、って訳か。確かにインパクトはあるだろうが、こんなキチガイな宣伝方法を採用する部活に進んで入るヤツなんていないだろうに。というか誰か教えてくれよ。全く、触らぬ神に祟りなしとはいえ、薄情なヤツらである。
と、朽木先輩は不意に声のトーンを下げて呟いた。

「……あれ程愉快そうな還界を見たのは、久方ぶりだった」

いや、確かに彼女は楽しんでたっぽいけど、それは新しいオモチャを手に入れた子供がはしゃぐのと同じ理屈で、そんな真剣に言う台詞じゃないと思うんですが。

「還界は、一存在でありながら完全であることを是^ぜとしている。故に、不完全である己や他人を蔑^{さげす}む傾向にあつてな。が、今日の彼女は違った」

……えーっと、要するに優等生思考ってことだろう。ところで、彼女に弱点らしきものなんてあるんですか？

「知りたいか？」

顔に出ていたらしい。ずい、と無意味に暑苦し……もとい年季の入った顔を近づけられ、思わず一步退く。

「彼女は、母親と二人暮らしだ」

また話が飛びましたね、先輩。

「両親は早い段階に離婚してな。しかしそこに至るまでの過程が当時幼かった彼女には直視し難いものだった」

見てきたように言わないで下さい。というか人様のプライバシーをなんでそうペラペラ喋ってるんですか、アンタ。

そう憤りつつも――俺は、止めようとは思わず、耳を傾けていた。彼の口調が、そうすることを望んでいた。

「或いは、彼女の現在の、あ……攻撃的な性格が形成されたのもその辺りに理由があるのかも知れんな」

関係ない訳がない。というか、俺からすれば丸分かりだ。

“――大地君のせいじゃないよ。わたしが悪かったんだよね？
…ゴメン、ね？”

ヤメロ。そんな顔で笑うのは。

お前のせいじゃないって言ってるのに。なんでわざわざ罪を被ろうとするんだ。

「彼女の髪が白髪と化したのもその頃だ。余程精神不安定だったの
だろうな」

「……マジっすか？」

悲劇のヒロインここに極まれり、と銘打ちたくなるほどの不幸っ
ぶりである。

と、

「——という説もある」

くくく、と何がおかしいのか朽木先輩はくぐもった笑いを上げた。
なんですかそれ。

「いや、失敬失敬。ここまで飛んだ話にそこまで真剣に耳を傾ける
人間は稀少なものでな。少々感動していた所だ」

「は？」

えーっと、行間を読むと……つまり、ウソってことですか？

「さて、な」

わざとらしく肩を疎める朽木先輩。心底愉快そうな笑顔がやたら
とムカツく。つつーかアレか、黙禱部はサドの巣窟か？

「あのですね……って、あれ？」

気づけば、朽木先輩の姿はいつの間にか消失していた。人騒がせ
のクセに無責任な方である。

「ったく……余計なこと、思い出しちゃった」

ふと見上げると、頭上はどんよりとした灰色の曇天。冴えないね、
お互い。

やや沈んだ面持ちで帰宅すると、留守番電話にメッセージが入っ
ていた。再生する。

『今夜十時半、部活棟の屋上に来るように』

はい？ えっと、この声……或華さん、だよな？ でも、なんで
俺んちの電話番号知ってるんだろうか。

『……ああ、来なかったらコロ——』

ガチャン。絶妙のタイミングでメッセージが切れた。

「――行くか」

十秒と掛からず、決断を下した。だってホラ、この若さでセメント漬けにされて生きたまま東京湾に沈められるのはやだし、昼間の違和感と朽木先輩の話に少し感じる所があったし、それに――

――真に遺憾ながら。どうも、俺は或華さんとの激しくも痛快な日々が、それなりに楽しく感じられる余裕が生まれるくらいにまで成長(?)したようだった。

夜の学校は、おあつらえ向きにひっそりと静まり返っている。明かりは一つもない。まあ、あつたらあつたで怖いんだが。

「さて……どこから入ったもんか」

ノコノコとやってきたはいいものの、正門はがっちりと施錠されていては入れそうもない。

困ったもんだ、と意味もなくきよろきよろ辺りを見回していると、
「……………」

薄く広がる雲のせいか、あるいは空気が悪いのか星はちっとも見えやしない。

唯一見えるのは、手を伸ばせば触れられそうな程近くにあるように見える、誰かの目の形に似た半分の月。まるで、一挙一動を見張られているような幻想に囚われる。

が、俺の意識はその下に集約されていた。

金色の半身を見上げる、白髪の幽鬼。……いや、あれはヒト。或華さん、その人だった。彼女が立っているのが屋上の落下防止用の柵の上だったせいで、浮いているように見えただけ。顔がきよろきよると動いているあたり、待ちくたびれている様子だ。あ、柵に八つ当たりしてる。

「こりゃ、早く行ったほうがよさそうだな」

校舎を取り囲む塀をぐるりと周って、監視カメラ(この学校、つい五年程前に建てられただけあってなかなかハイテクなのだ)のな

さそうな場所から、レッツ不法侵入。やれやれ、入学一ヶ月にして早くも停学、なんてのは是非とも避けたい。

何はともあれ無事に潜入成功。部活棟の玄関はカギが開いていたので助かった。多分、或華さんもここから中に入った、ということだろう。

「：それにしても」

暗い。

いや、モチロンスイッチを押せば文明の英知を一身に受けることはできるんだが、守衛さんやら当直の先生やらがまだ残っている可能性も考慮にいれると、あまり目立つ行動は控えておきたかった。

どこかの窓が開いているのか、時折吹く隙間風の音がやたらと耳につく。こりゃ、確かに幽霊やらなんやらが出てきてもおかしくないシチュエーションである。

屋上のカギは開いていた。重々しいドアを、ゆっくりと押し開ける。

「……」

流れるような白髪が、夜風に揺れて詠うたっている。

「……或華、さん」

声を掛けるのを躊躇ためらった。

高く澄んだ無色の旋律。教会にでも流れていそうなどこかおぼろげですらある音の連なりは、銀幕に覆われた厳かな神殿を連想させた。

「……」

或華さんは気づかない。あるいは気づいて無視しているのか、こちらに背を向け、金色に煌く半月を見上げ、祈るように詠っている。その表情にいつもの刺々しさはなく、例えればそう——聖母、と言うヤツに近かった。

……困った。こんな不意打ちは、反則だと思う。

だから、不覚にも見入ってしまった恥ずかしさを隠すために、

「……或華さん、パンツ見えてますよおぶっ!？」

冗談を言い終わる前に、細い柵の上で高速回転した或華さんのかかと落とし気味の回し蹴りが顔面にクリーンヒットした。……ちなみに黒

「ごふっ!？」

追撃が入った。……ま、まさか心を読まれてるわけじゃないよな？ この人ならできかねないので不安である。

すたすたすた、と吹っ飛んだ俺に近づいてくる或華さん。

「……何寝転がってるのよ、あなたは。踏みつけて欲しいのならその減らず口で懇願しなさい」

誰が言うか。俺にそんな趣味はない。

「いっつ……或華さん、今の歌は？」

聞いたことのない歌だったので尋ねると、或華さんはきょとんと意外そうに目を丸くした後、

「……忘れなさい。あなたには関係のない歌です」

あなたには関係のない歌？ なんだそりゃ。

「……もしかして、照れてる？」

「何か言いましたか？」

笑顔で殺気を飛ばす或華さん。うお、マジで怖い。

黙りこくった俺を屈服したと判断したのか、或華さんはどこか愉しそうに言った。

「それじゃ、行きましょう。標的はすぐ近くにいるわ」

「すぐ近く？」

「ええ。貴方の後ろに」

……引っかかるもんか、引っかかるもんか。さっきから執拗に首筋辺りを風がくすぐってきやがるのが気になるが、それだけだ。

「と、ところで或華さん。用件は？」

「ああ、説明って面倒なのよね」

おい。

「……冗談よ。天文学部からの依頼。結論から言うわ——『幽霊退治』よ」

第三話：交錯した道の果てに

……

……

………どれだけの時が過ぎたんだろう。

「――あの、或華さん？」

「何？」

「……いえ、なんでも」

「そう」

無明の校舎を、二人きりで歩くという特異な状況。もしかすると喜ぶべきシチュエーションなのかも知れないが、残念ながら今の俺にそんな余裕はなかった。

前方には深い闇。ただの学び舎であるはずのこの場所が、明度が変わるだけで町外れにある幽霊屋敷となんら遜色ないおどろおどろしさを纏った空間になるのはなんの嫌がらせか。

んで、後方には白い或華さん。相変わらずの真っ黒な衣装で身を包んでいるせいで、振り向けば雪のように白い顔と、暗中にあってなお光沢を放つ長髪だけが見えて、必然的に首だけが宙を浮いて彷徨ってるような構図になる。割と冗談抜きで怖い。

しかも、彼女は俺の袖を指で掴んでいる。まるで普通の女子生徒みたいな仕草だ。しかも彼女のトレードマーク(?)である鼻歌も聞こえてこない。心なしか、表情が強張っているような気もする……もしかして、幽霊の類は苦手なんだろうか、この人。意外だ。果てしなく意外だ。

というか、なんでユーレイとやらの居場所がわかってるっぽい或華さんじゃなく、ロクに事情を説明されていない俺が先頭なんだろうか。屈強な戦士の前にか弱い白魔道士を配置するくらい間違ってるぜ。

しかし、人間はどんな環境にいてもある程度時間が経てば慣れて

しまうものらしい。研ぎ澄まされた五感が、平時と同じ、いやそれ以上の外部情報をひっきりなしに送信してくる。

所々木製の古式ゆかしい建物。三日経ったパンのそれに似た廊下の臭い。突然の呼び出しの内容が気になったせいでほとんど食べられなかったハンバーグの風味がほのかに残る唾液の味。ひんやりと体を撫ぜる、隙間風の冷たさ。そして、背後から規則正しく聞こえてくる、或華さんの息遣い。今の俺は、彼女の心臓の鼓動すら幻聴している。

——いや、それがどうシタ。

「……イカン。まずは落ち着け、俺」

「……何か言った？」

————ガ。

話すな、このアホ女。その声を俺に届けるな。

「別に、何も」

途切れそうになる理性を総動員して答えた。

なんで今まで考えもしなかったのか、あるいは無意識で無視していたのか。

よく考えてみる。後ろにいるのは、性格に目を瞑れば客観的に見て他に類を見ないレベルの美少女。状態は一对一。場所は他の要素の邪魔が入りようのない隔離地帯。いかに彼女がスポーツ万能と言えど所詮女子。本気で組み伏せれば五分とかからず、彼女は、

——ドクン。

——ド それは、

——ドク まるで蜘蛛の巣に掛かった蝶。

——かたん。

「っ!？」

或華さんは僅かに目を見開いた。

無理もない。突然振り向いた俺は、さぞかし飢えた獣のような血走った視線で彼女を凝視しているだろうから。

そのまま、俺は、

「あなたにも聞こえた？ 今の音」

「……は？」

オト、おと、尾と、音。……ああ、やたらと脳髓に響く、伝達手段の一種の、アレか。

「音が、どうしたって？」

「……呆れたわね。まあいいわ、元々あなたには存在以上の役割を求めているもの」

いつも通りのその傲慢なセリフが、心地よく鼓膜に、その奥に届く。これを歪めさせられるのかと考えただけで目の前が真紅に染まりかける。

――迷うことはない。／遠い日のデジャヴ。

――事は一息で終決する。／事実、そうだったように。

――誰にも咎められず。／輪郭のぼやけた泣き顔。

――セカイに支障はない。／ココロが壊れている。

「――ハッ。ありえ、ねえ」

「え？」

幻視から還る。

……悪いな。あの時とはもう違うんだ。もう二度と、他人のセカイを自分から傷つけないって、決めたんだ。

「――うし。それじゃ行くか、或華」

「な――……『さん』が抜けてるわよ？」

いきなりぞんざいになった俺の口調に閉口した或華は、しかし強気を装って三日月の形をした目で睨みつけてくる。ホントは嬉しい

クセに、天邪鬼なヤツだ。

「だったらまず俺を名前で呼ぶんだな。俺は神斜大地だ」

「……は、笑わせてくれるわね。あなたは、叩き落としたハエにいちいち名前を付けるっていうの？」

確信する。コイツ、間違いなく盛大に勘違いしてやがる。

他人を陥れることによって、己の価値を高めようとする倒錯。

他人に罪を被せることによって、正義であろうとする倒錯。

還界或華。

神斜大地。

変わらない。変わらない。

そんなことしたって。——誰一人として、救われやしないのに！

——駄目だ。これ以上、昔の俺を見たくない。

「いい加減にしろ、或華。他人けなした所で、お前が偉くなる訳じゃねえ」

むしろ卑しく見えるぞ。

「！……何を、突然」

意識的か無意識的か、どちらにせよ凶星だったらしい。平静を装っちゃいるが、夜目に見ても動揺しているのは明らかだ。

もしかしなくても、これは彼女を傷つけることになるだろう。一年もしない内に、俺は自分を律する為に誓った戒めを破ることになる。

それでも。

それで彼女が、救われるなら。

あるいは俺が、救われるなら。

だからこれは——自分勝手に独りよがりな、俺の最後の償いだ。

「お喋りな神父野郎先輩が教えてくれた」

——今思えば。予感は、初めて会った時からあった。

人が、人を嘲^{あざけ}るのには大きくわけて二つの場合がある。単に人の価値を理解できない馬鹿か——そうでもしないと、自分の価値を見出せない馬鹿。そして彼女の場合は、後者だった。

——それは、少し昔の滑稽な話。

両親の不和、及び離縁の責任は自分にあると信じ込んだ少女。あまりにも幼く脆かった彼女の心は、そうしなくては唯一の拠^{シアフセ}り所となる過去を繋ぎ止められなかった。

私がいけない子だったから。私が悪い子だったから。私が弱い子だったから。私が強くなかったから。私が、私が。

そうして彼女は自らを漂白した。

かのマリー・アントワネットのように、短期間にして純白と化した長髪がその証。

強く在ることを決意した彼女は、その戒めだけを残して、昔の自分を綺麗に放棄した。

なんて、皮肉。

これを晒^{わら}わずして何を晒^{わら}おうか。

昔^{かこ}を否定し、未来^{いま}を強く生きたことを契約した彼女は。

結局のところ、遠い日の残滓に囚^こわれているに過ぎないんだから。

それは、誰に宛てられたものでもない静謐^{みずから}な黙禱。

織り重ねられた鉄檻の中で、白い少女は供物を捧げる。

「……俺は、お前の境遇やら心情やらは知ったこっちゃない。黙祷でも懺悔でも、やりたきゃ勝手にやってくれ。——そう思ってた」

だけど、放っておけなくなってしまった。このたかが数日間の交流で、こんなことを思うのはおかしいかも知れないが、

「待ちなさい。……あなたには、関係のない話よ」

「分かってる。——でも、言わせてくれ」

——いや。いい加減、自分を偽るのは止めにしよう。彼女の矛盾を指摘するなら、その前に、俺自身が素直にならなくちゃ。

「——悪い。俺、お前に惚れちまったみたいだ。だから、そんな悲しい生き方しないでくれ」

今更だけど、白状しよう。

あの日、銀色に輝くお前を一目見た時から。

もう——心は、決まっていたみたいだ。

だからこそ、言わせてくれ。

「お前が望む、自己犠牲のカタチは。

他人をも犠牲にしてまで、自分の心を偽るやり方は。

お前自身にとっても、お前を大事に思うヤツにとっても、ひどく辛いものなんだ、ということ。

俺の告白が、安普請の建物に僅かに響き、消えた。

「……………」

或華さんは、俺の一世一代の爆弾発言の途中で俯き、そのまま動きがない。握り合わせた指と指がぎゅっ、と絡みつく様は、自分の寄る辺を必死で探しているようにしか見えなかった。

「……あなたは、本当に」

やがて、彼女は小さく呟いた。

「ん」

「……本当に、……TPOを弁^{わきま}えない、痴^しれ者です。しかも、今回は特段と意味不明です」

「……そ、そうか？」

……そんなバツサリ切らなくても、いいんじゃないだろうか。正直、凹むから。

「……そろそろ帰りましょう。天文学部には幽霊は退治したと伝えておきます」

くるっ、と踵を返して歩き出す少女。……そんなんでいいなら、そもそも律儀に校舎を探索する必要なかったんじゃないか？

「りょーかい」

まあ、特に言うべきことも、言いたいこともない。……そういや返事を聞いていないが、改めて問い掛ける気力は勿論残っちゃいなかった。俺は、黙って彼女の後に続いた。

……今思えば。振り向きざま、彼女の口が音もなく文字を紡いだような気もする。

——感謝の意を表す、「あ」から始まる素っ気ない五文字の定型句を。

——とまあ、そんなこともあった。

時の流れは早いもので、あれだけ満開だった桜並木も、いつの間にか青々と生い茂る緑に追いやられてどこかへ行ってしまった。まあ、きつとそれでいいんだろう。思い出は過去にあるからこそ美しいんだ。過去を大事にするのはいいが、それで未来を縛^{いま}っちゃうのは少しもったいない。

「——お前は湖に小石を投じた。波紋が隅々まで行き渡るには少々時を必要とするが、必ずや終着点に辿り着くだろう。……どうやら、お前の深奥を見誤っていたようだが、何にせよ僥倖だ」

夜の件について（と思われる）朽木先輩の台詞はこれだけだ。と

というか、或華さんの事情といいこの人は一体どこから情報を仕入れてくるんだろうか。或華さんが話したとは思えないし。

「……ち」

表面上、或華さんの「世界は私の周りを回っている」的尊大な態度は相変わらずだ。俺の称号は足やら家畜やら奴隷一号から大地に昇格したが、基本的人権を尊重されただけなのでイマイチ喜べない。

「……いち」

やってることも変わらない。どこかの部活のSOSを片っ端から受信し、暴力恐喝決闘その他の穏便な方法で颯爽と解決し、それ以外の日は聖書（エロ本）を呼んで日々を謳歌している。

「…だいち」

んでもって俺はと言えば、ちゃっかり黙禱部に正式入部しちゃってたりする。

特に理由はない。……いや、さすがにそれはウソだ。単純に言おう。——惚れた女の行く場所なら、地獄にだってお供しよう、ってな心意気だ。……むう、改めて口にしてみると恥ずかしいことこの上ない。

と——

「大地！」

「いだあぁあっ!？」

——耳たぶを掴まれ、容赦なく振じ上げられた。痛覚を持って生まれてきたことを後悔するぐらいの痛みが奔る……が、或華さんは数秒で離してくれた。

「ってえ……何すんだよ、或華さん」

「当然の報いです。使えない耳を付けていても邪魔なだけでしょう？」

フフン、と悪魔的に笑う性悪女。

「単に或華さんの話が長くて飽きただけ——いや、ジョークジョーク。イッツアメリカンジョーク」

「……まあいいわ。それじゃ行くわよ、大地」

両の拳に早くもグローブ装着、まさに殺る気マンマン、戦闘態勢といったところか。

あの天文部の一件から、黙禱部（そうそう、この部活名は、朽木先輩が考えたらしい。こんな名前にしたら入る部員も入らないだろうに、何考えてるんだかあの人）は積極的に『対部戦』を申し込むようになった。要は人助けだけでポイントを稼ぐのは面倒だ、いっその他の全部活を活動不能になるまで叩きのめしてやれ——或華さんの現在の行動を簡潔に文章化するとこんな感じだ。サド度が大幅UPしてやがる。

……まあ、個人的には。

誰かの為にひたすら贖い続けていた当時の彼女よりも、自分の為にひたすら走り続けてる今現在の彼女の方が、よっぽど好感を持てるんだが。

「そういえばさ。あの時の幽霊って、結局天文部の人の勘違いか何かだったのか？」

ふと、気になっていたことを聞いてみる。というのも、ここ一ヶ月付き合って（いや、恋人として、って意味じゃあないが）みて分かったのだが、或華さんは依頼されたことに対しては確実に結果を出すまで途中で投げ出さない、いわゆる完璧主義者だったので、あの依頼だけあんな適当な終わらせ方をしたことに、ずっと違和感があったのだ。

「……また昔の話を持ち出したわね。別に、いいじゃない」

微妙に歯切れが悪かった。これも彼女らしくない。……何か、隠してるのか？

疑惑の視線を彼女に向ける。相手も相手に譲る気はないらしく、真っ向から俺を見返す。

奇妙な沈黙が続くこと約三分。

「……はあ。分かったわよ、言えればいいんでしょう？」

半ばヤケっぱち気味に、或華さんが先に折れた。おお、意地の張り合いで勝ったのは久しぶりだ。良くやった、感動した、俺！ ……そこ、哀れとか言わない。

「……あれは、あなたが来る前に既に解決しておいたの。それだけ」
やがて、なんでもなしのことにように、或華さんは言った。

「え？」

いや。それは、明らかにおかしい気が。

「解決した、って。……幽霊って、ホントにいるのか？」

いや。そこじゃないだろ、俺。何、今更聞くのを躊躇^{ためら}ってるんだ、アホ！

「いるわよ？」

——って、マジか！？ 思わぬ所から衝撃の新事実発覚。

「なんなら、話してみる？」

友達を紹介するわ、と言わんばかりの軽さで、或華さんは言い放った。

「え……あ、ああ。じゃあ、話させてくれ」

なんだか変な流れになってしまったが、これはこれで非常に興味がある。まさか或華さん、祈祷術とかイタコとか、そんな怪しげな分野にまで精通してるのか……？

果たして、彼女は目を瞑って何やらボソボソと呟き、

「————ン、は、ア————」

聞き方によっては、その、凄くアレな悩ましげな声を上げて、身をよじらせた。

「お、おい……大丈夫か？」

不安になって、彼女に近寄る俺。

『……ン、あ、はい。大丈夫です』

小首を傾げて、鈴のような声で、少女は答えた。

「——はい？」

思考停止。

なんだか――或華さんの雰囲気が一気に様変わりした。まるで、彼女の双子の妹を見ているような、いや違う、彼女と同じカタチをした、全く別のモノを見ているような、違和感。

『あ、あの……わたし、変ですか？』

ちよいちよい、と髪を直し、黒服のロングスカート(?)の裾を気にする或華(誰か)さん。それも、彼女らしからぬ仕草だ。彼女は、いつでもどこでも堂々としている。

ええと、混乱するな、俺。話の流れからするとだ、今俺の目の前にいるのは、或華さんの中にいるのは、幽霊さんって理屈になるんだが、それは、その……どうなんだ？

「えーっと……お前、名前は？」

既に知っている人に改めて名前を聞くというのもおかしい話だが。

『あ、わたし、ミチルって言います。初めまして大地さん、じゃなかった、お久しぶりです、大地さん』

ペコリ、とカワイらしく頭を下げる或華^{ミチル}さん。……とてもじゃないが、これが演技とは思えない。第一、或華さんに俺を騙す理由なんて――いや、彼女が理由なしに俺を苛めることなんてしょっちゅうだが、今回は訳が違うと思う――ないし。

よし。とりあえず、彼女がミチルさんであることを前提に話してみよう。

「お久しぶり？」

って、会ったこと、あるのか？

『あ、ごめんなさい。実は私、あの日……だ、大地さんがアルカに告白した時に、その場にいたんです』

「はあ。そ、そうなんすか」

本当だしたら赤面の至りなんだが、告白した相手にそう言われなくても、どう反応すればいいものやら。

『ご、ごめんなさいっ！ わたし、アルカがこんな遅くに来るから、どうしたんだろうって気になって、それで』

心底申し訳なさに、何度も頭を下げる或華^{ミチル}さん。……或華さん

の方にも、この人の十分の一の憤みがあればなあ、と思ってしまったのは秘密だ。

ん——？　　そういえば、この声、どこかで聞いたような……？

“……忘れなさい。あなたには関係のない歌です”

「あ！　あの時の歌声って、まさか」

『あ、はい。あれ、わたしです』

そうか。妙な言い回しをしたと思ったら、そんな裏事情があったのか。

いや待てよ？　だとすると、いつもの彼女の鼻歌もまさか……？

「なあ。それじゃ、彼女の鼻歌って、全部？」

『はい♪　わたしが表に意思を伝えるのって、彼女を介してしか出来ないんです。でも、お話するわけにはいかないじゃないですか？』

そりゃそうだろう。間違いなく、二重人格者だと思われる。

「な、なるほど、ね」

確かに、或華さんが歌好きってのも微妙に似合わない気がするし。

——ええと。なんの話を、してたんだっけ？

「——ああそうだ、幽霊の話だった。その、それじゃ……ミチルさんが、天文学部に何かした、ってことか？」

俺の問いに、或華^{ミチル}さんは驚きに目を見開き、それから困ったように目を逸らし、

『そ、それは……まあ、そうなんですけど』

曖昧に答えた。あからさまに怪しい。

「なんで、そんなことを？」

突っ込んで聞いてみる。

『う……その、あの……た、頼まれちゃって』

「頼まれた？」

一体、誰に？

あ、そうか……もしかして、

「或華さんに？」

『う』

凶星だった。この人、或華さんと違って分かりやすい。

「でも、なんで？」

そう、理由がいまいち分からない。仮に黙禱部の功績を増やしたいただけだったなら、わざわざあの場所に向く必要はないわけだし。

『んー……ごめん、アルカ。わたしには誤魔化しきれないよお』

或華さんのカタチをした或華^{ミナル}さんは、或華さんに向かってか、そう言った（ええい、ややこしい！）。

『あの、ですね。実は、彼女がわたしに言って来たんです。「彼と話がしたいから、ちよっと手伝ってくれないか」、って』

「？」

話だって？ 別に、昼間の時点で機会なんて何度もあったと思うが。

『あ、あのっ！ それじゃわたし、戻りますね！ どどど、どうもありがとうございましたっ……すいませんっ！』

「あ、ちよっと——」

言うが早いか、或華^{ミナル}さんは固く目を閉じてしまった。ややあって、また例の寝起きめいた悩ましげな声がして、

「……あの、バカ」

或華さんが、或華^{ミナル}さんを罵倒した。

「ええ、つと。その、或華さん？」

「ええ。おかげさまでね」

チッ、と大きく舌打ちする。なるほど、確かに或華さんだった。

「——それじゃ、行きましょう。もう約束の時刻になるわ」

そう言われて気づいたが、確かに結構な時間を消費してしまっている。

「っておい、まだ質問の答えを——」

言いかけて、

「――どうしたの、大地？」

ふと気づくと、心持ち柔らかな表情で俺を見据える白い少女がいた。

校舎を茜色に染め上げる夕陽を受けて、燦然と輝く銀色の星^{ヒカリ}。

――ああ。なんだかもう、いいや。

「いや。……よし、行こう」

気持ちを切り替えて、前に進む。さっきの話は、またいつか聞かせてもらおう。過去にこだわり過ぎて歩みを止めるなんて、俺たちらしくないし、な。

今日の相手はボクシング部。女が相手ということで二つ返事で『対部戦』を承諾した彼らだったが、後一時間もすればその浅はかさを心から後悔しているだろう。安心しろ、お前達の亡骸に向けて俺が黙祷を捧げてやるから。十秒くらい。

そうして、俺と或華さんは並んで決戦の地へと向かう。

二人の関係は不明。何も始まっていないような気もするし、普通とは何か一味違うような気が、しないでもない。

まあ、どちらにせよ結論を急ぐ必要はないだろう。

あの日の答えも、さっきの答えも、きつと聞ける。不思議と、そんな確信があった。

だから。

とりあえず、少なくともその時までには――こいつと一緒に、走り続けたいと思う。

第三話：交錯した道の果てに（後書き）

終わったー。

最後の方は結構楽しく書けました。

それしてもこの話のジャンルはなんなのか、という（笑）。最後の方は恋愛っぽかったけど、前半は全然だしなあ……うーん。

まあそんな訳で、ここまで読んでくれた方々、拙い作品でしたが、どうもありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2490b/>

世にも奇妙な或華さん

2010年10月8日15時48分発行